

「批判哲学」と「超越論的観念論」の連続性と不連続性

——「知」の「客観的実在性」概念を指標にして——

田端 信廣

1. 初期ドイツ観念論の出発点とその根本性向

「ドイツ観念論」と称される哲学運動は、いつ、どこで始まったのか。その起点は、一七八九/九〇年であり、それはラインホルトの『人間の表象能力の新理論試論』（以下『試論』）ないし『哲学者たちのこれまでの誤解を是正するための寄稿集 第一巻』（以下『寄稿集Ⅰ』）とともに始まった。

『試論』は、カントの認識能力批判がさまざまな誤解にさらされ続けてきた「運命」¹の原因を問い、その一因が「認識」の「前提」をなしているはずの「表象」概念を、カント自身が無規定的なままに放置してきたことにあると考え（vgl. *Versuch* §64）、認識諸能力の基底に「表象」を据えて、「表象」から認識諸能力（「感性」-「悟性」-「理性」）を導出しようとした。かくして、ラインホルトの「表象能力」理論が、未解決なままに放置されてきた批判哲学の「前提」の根拠解明にほかならない以上、ここに、カントの認識能力批判を改めて根拠づける試み、「批判哲学」をメタ・レベルで根拠づけようとする企てが開始されたのである。

『寄稿集Ⅰ』は、この考えをさらに徹底し、ア・プリオリな「表象の根源的諸形式」の「基底」を「意

引用に際して使用した略号

Versuch: *Versuch einer neuen Theorie des menschlichen Vorstellungsvermögens*. Mit Churfürstl. Sächs. gnädigsten Privilegio. Prag und Jena: bey C. Widmann und L. M. Mauke 1789. (2. Aufl., Jena 1795)

Beyträge I: *Beyträge zur Berichtigung bisheriger Missverständnisse der Philosophen. Erster Band, das Fundament der Elementarphilosophie betreffend*. Jena: bey Johann Michael Mauke 1790.

Auswahl vermischter Schriften II: *Auswahl vermischter Schriften*. Zweiter Theil. Jena: Johann Michael Mauke 1797.

Beyträge-U: *Beyträge zur leichtern Uebersicht des Zustandes der Philosophie bey dem Anfange des 19. Jahrhunderts*, Hamburg: Friedlich Perthes 1801-1803. (H.1は第一分冊)。

KA: *Kant's gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin und Leipzig 1900ff.

GA: *J.G. Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, hrsg. v. Reinhard Lauth und Hans Jacob. Stuttgart-Bad Cannstatt 1962ff. (ローマ数字は系列数、算用数字は巻数)。

Jacobi an Fichte: *J.H. Jacobi, Jacobi an Fichte*. Hamburg: Friedrich Perthes 1799. In: *Friedrich Heinrich Jacobi Werke*, hrsg. v. K. Hammacher und W. Jaeschke. Bd. 2, 1. Hamburg 2004.

ALZ: *Allgemeine Literatur-Zeitung*. Jena u. Leipzig 1785-1803.

注

1 『試論』の「序文」には「カント哲学のこれまでの運命について」という表題が付されている。

識の事実(Tatsache)」としての「意識律(der Satz des Bewußtseins)」に設定し、これを「第一根本命題」として、これから後続諸命題を導出する「根元哲学(Elementarphilosophie)」の体系を提唱した。ラインホルトはここで、自分の「表象能力」理論の「帰結」が「第一批判」に「根拠」を提供するのだと断言するにいたる²。後に(一七九六年四月)、フィヒテがC・Chr・E・シュミートの「経験的心理学」に瓜二つの批判を浴びせていることも³、両者の哲学の位相に関する同様の相違を示して興味深い。

フィヒテはさらに「意識の事実」の根底に「事行(Tathandlung)」を据え、哲学の原理のメタ理論化をもう一步押し進める(「エーネジデムス書評」)。他方、「根元哲学」の体系的形式、「根本命題-哲学(Grundsatz - philosophie)」の構想は、「学としての哲学」構想を生み出し、これが初期の「知識学」やシュリングの初期論文に決定的な影響を及ぼし、初期ドイツ観念論の体系構想を規定していくことになる。「哲学」を「学」の地位にまで高め、「学としての哲学」をうち立てることこそ哲学の課題であると、フィヒテも、シュリングも、そしてヘーゲルも口をそろえて主張するようになる。

フィヒテの『全知識学の基礎』は、その「第一部」に三つの「根本命題」を配するという体系構成を採っていたため、——詳細に検討すれば、内実はそうではないのだが⁴——多くの同時代人の眼には、「根本命題」から理論的自我と実践的自我の諸活動の「形式」と「内容」を、直線的にあるいは「演繹的に」導出する体系、つまり、すでに破産しているラインホルト流の「根元哲学」体系の焼き直しだと受けとめられた。そうした誤解を避けるべく、フィヒテは数年後には「知識学」の叙述方法を改訂する(「知識学の新叙述の試み」、「新たな方法による知識学」)が、それにもかかわらず、それ以降も「知識学」は相変わらず「根本命題-哲学」の代表とみなされていた。

さて、このようにして進行した哲学の(精確には、認識の)原理のメタ化は、不可避的に「経験の大地」からの離脱を伴っていた。「学の原理論(Wissenschafts - lehre)」としての「哲学」は、もはや「経験の可能性の制約」を問題にするのではなく、いわば、その「制約の制約」の導出を哲学の主要課題とするようになる。すなわち、カントの場合のように、認識のア・プリオリな諸形式を単に「見いだす」ことが問題なのではなく、それらを超越論的自我の根源的働き自身から「演繹」することを課題とするようになる⁵。だが、その「演繹」行程は、外見上「知」の経験的「素材、内容」

2 『寄稿集I』はこう述べている。「この著作〔『純粹理性批判』〕では根拠(Grund)としてとして使用されるものすべてが、表象能力の理論では〔…〕単なる帰結(Folge)として登場して来る」(Beyträge I, 295)。

3 フィヒテの批判はこう述べている。「知識学は、意識の直接的事実であるもので終わる」のに対して、シュミートの「体系」は「彼が直接的事実だとみなしたのから始まる」。それゆえ「知識学の尽きるところ、それはまさしくシュミート氏が彼の哲学を始めるところなのである」(GA I/3,264)。このフィヒテ-シュミート論争の詳しい経緯と評価は、拙著『書評誌に見る批判哲学-初期ドイツ観念論の展相』(見洋書房、二〇一九年)第七章第三節を参照されたい。

4 すでに「概念について」論文は、その行程が「循環的」であることをこう述べている。「根本命題が汲み尽くされている」と言えるのは、「根本命題が必然的にすべての設定された命題へと導き、またすべての設定された命題が必然的に再び根本命題へ還帰するときである」(GA I/2,130)。『全知識学の基礎』の「第一根本命題」も(少なくとも「理論的部門」では)「統制的」原理であり(vgl. ibid., 282)、したがって『基礎』の行程も本質的には「循環的」であるとみなされねばならない。

5 カントが「カテゴリー」を論理学の「判断表」のうちに「見いだした」のに対して、『全知識学の基礎』では、「あらゆるカテゴリーそれ自身が、絶対的主観としての自我〔の根源的働き〕から導出される」(GA I/2,262)。

を度外視した、自我の諸「形式」の発生の自動展開のような様相を呈する。ALZ（一七九九年八月二八日）紙上での、カントによる「知識学」無効「声明」の焦点は、この「内容」を欠いた「形式」の自己展開に絞られているのだが、実はこの点に関する問題の所在と批判は、カントの「声明」以前にドイツ観念論の発端ですでに明らかになっており、そして、その後さまざまな形を採って繰り返し論難されてきた批判の延長線上にある。その意味では、カントの「声明」による批判は、一周遅れの感が否めない。

2. 「知」の「実質的制約」の欠如批判——カントの知識学批判「声明」以前

たとえば、すでに A・W・レーベルクによる『寄稿集 I』書評（一七九一年一月）は、ラインホルトの唯一の「根本命題」は表象の諸「形式」を規定できても、その「内容」は規定できない、そのためには「根本命題」のほかに多くの経験的諸命題を必要とすると指摘していた（ALZ,1791,Nr.26,27）。また、シュミートによる『哲学知の基底について』書評（一七九二年四月）も、「根本命題」は「けして実質的な基底命題ではなく、[…]規範的な基底命題でしかありえず」、よって「学の内容自身に普遍的で不変なものという特性を付与することはできない」との異論を提出していた（ALZ,1792,Nr.92,93）。両者は同じ点を、すなわち、「根本命題」からは知の多様な内容－実質を導出できないという点をついている。ラインホルトはこれらの批判を勘案して、もう一七九二年六月にはその立場を部分的に修正、転換する。それが、D・ヘンリッヒの言う「ラインホルト I」から「ラインホルト II」への転換である⁶。

フィヒテの「知識学」に対しては、同根の、しかしもっと厳しい批判が浴びせられてきた。たとえば、ヤコービは「無神論争」を機縁にフィヒテに書き送った「公開書簡」（執筆は一七九九年三月、公刊はその秋）で、「知識学」は「理性の外部の一切のもの」を無に変える「ニヒリズム」であると断罪していた。フィヒテの「純粋な超越論的観念論は、「客観的にそれ自体として存立しているこの実在を頭の中で廃棄し、無化する」、そして「その実在は完全に主観化され、われわれ自身の産物に変えられてしまう」（*Jacobi an Fichte*,14 u. 39）。シュミートはそれの三年ほど前に、もっと通俗的な表現で同じ趣旨の「知識学」批判を展開していた⁷。「知」の「ア・プリオリな形式」がその

「実在性のカテゴリー」は「第一根本命題」から(ibid.,261)、「否定性のカテゴリー」は「第二根本命題」から(ibid.,267)、そして「制限のカテゴリー」は「第三根本命題」から導出される(ibid.,282)。「実体」や「因果性」も、これ以降に展開される自我の複合的働きに基づけて導出される(vgl. ibid.,299,391)。

- 6 ラインホルトは一七九二年の夏には、「根元哲学」の内的編成を修正する。彼は、「根本命題」からの一方的・直線的演繹行程(これが「ラインホルト I」にあたる)を放棄し、「根本命題」からは直接導出できない「意識の諸命題」を体系内に編入して、これらと「根本命題」との相補的、相互的根拠づけの体系(「ラインホルト II」)を構想するにいたる。後者では、「根本命題」がその確実性を後続諸命題に一方的に転移するようなことはなく、「根本命題」は意識の経験的諸命題を根拠づけることを通して、その都度自らが「究極の根拠」であることを段階的、暫定的に確証していく。この詳しい経緯については、拙著『ラインホルト哲学研究序説』(明書房、二〇一五年)第六章の第三節と第五節を参照していただきたい。
- 7 フィヒテは「自己意識のうちに現われてくる認識主観の概念のなかに観念的な絶対者をこっそりと押し込み、そして意識に現われてくるものすべてをそこから導き出すために、この創案された無限態の充溢から、必要と思ったものをいつでも必要なだけ引き出してきた」(*Philosophisches Journal einer Gesellschaft*

「内容」を意のままに産出し、そのことによって「客観的実在」を主観の産物に変えてしまう——これが、当時広く行き渡っていた「知識学」理解であった。

カントの「声明」での「知識学」批判は、上述したような批判の延長線上にある。彼も同じ点を批判している。すなわち、「知識学」は「純粋な論理学」にすぎず、そうである以上「認識の質料」に達することはとうてい不可能である、そもそも「純粋な論理学から実在的な客観を拾い集める (herausklauben)」などという企てはばかげており、認識の「実質的制約」を欠いた「形式的制約は空虚である」等々 (KA XII,370)。

カントは、フィヒテの超越論的自我論が「実質」、「内容」を欠いた、思惟の「形式」の単なる自己回転にすぎないと見ている (vgl. auch KA XII,241)。それに対して、フィヒテ自身はしばしば「知識学」と「論理学」の区別を強調し、前者が後者と異なり「内容」をもつことを断固として主張している (vgl. GA I/2,138 u. 261)。フィヒテは、「知識学では内容と形式は必然的に合一されている」、一体をなしている両者から「内容」が度外視され、そこから「形式」だけを分離することによって形式「論理学」が成立するのだ (ibid.,138)、と言う。だが、その「内容」とはつまるところ超越論的自我の「働き」自身のことである。したがって、その「内容」は「認識の質料」なるものから独立であり、それに直接的に制約されない。カントからすれば、それは質料を欠いた「形式」に他ならず、よって「知識学」は思惟の「形式」の自己回転でしかない。かくして、カントとフィヒテは「知」の「内容」についてまったく異なったものを理解している。両者では、そもそも問題としている「知」の位相が異なり、したがって「経験の可能性の制約」を問う問題機制の位相がずれているからである。

3. 「客観的実在性」の二重の源泉

カントが、「知識学」は「内容」を欠いた「形式」の自己回転にすぎないと批判するとき、彼は、フィヒテ的自我論における「知」(「表象」)には彼の言う「客観的実在性」に相当するものがまったく欠けているということを批判していると言える。「認識の質料」、「実在的な客観」、「実在的制約」の欠如といった批判的言辞が、そのことを明瞭に示している。

さて、「第一批判」で⁸繰り返して強調されている「表象」の「客観的実在性」は、或る種の二重性にまわりつかれている。「客観的実在性」は一方では、「経験」から独立した知のア・プリオリな諸形式の必然的「規則」に基づいているが⁹、もう一方ではそれは、その必然的「規則」が「経験的直観」に適用される際に与えられている「感覚的な質料」に基づいている¹⁰。概念史を遡れば、前者の

Deutscher Gelehrten, III, 106)。

8 「第二批判」でも「客観的実在性」は決定的に重要な役割を担っている。カントは「純粋実践理性の客観的実在性 (KA V,15,55)」、「道徳法則の客観的実在性」(ibid.,47)、「純粋意志の客観的実在性」(ibid.,55)について語り、とくに「自由の概念」に「客観的実在性」が保証されることによって、「神」や「魂の不死」の理念も「客観的実在性」を得ることを繰り返して説いている (ibid.,4,132,136)。純粋理性がその「実践的使用」において「客観的実在性」を得るというこの主張に、真っ向から異を唱えたのが(当時カント陣営に属していた)レーベルクである。彼は、実践理性は理論理性と異なり、「感性的経験」へのいかなる通路ももっていないがゆえに、「意志」を規定できず、よって「客観的実在性」をもつことはできないと批判している (ALZ 1788,188a, 188b)。このレーベルクの第二批判書評については、前掲拙著、第七章第二節を参照されたい。

9 たとえば、「このような[意識の必然的]統一は、ア・プリオリに必然的な統一とみなされねばならないの

場合「実在性」概念は、*realitas objektiva* を深源とし、後者の場合それは *realitas formalis* を深源としている¹¹。この「二重性」はカントの場合「客観的実在性」の根拠づけをめぐる「循環論」として現れてくる。たとえば、一方では、経験的「対象への関係」こそが「諸表象の結合を或る仕方では必然的にし、これらの表象を一つの規則に従わせる」のに、他方では「逆に、われわれの表象の時間関係における或る種の秩序が必然的であることによるのみ、それらの表象に客観的意義が与えられる」(B 242f.)のである。つまり、一方では認識の「実質的制約」が「形式的制約」の妥当性を保証し、他方では逆に「形式的制約」が「実質的制約」の妥当性を保証していると言える。「批判哲学」が「経験的実在論」にして「超越論的観念論」であることが、この循環を不可避なものにしている。翻って考えるに、有名な「内容を欠いた思惟は空虚であり、概念を欠いた直観は盲目である」(B 75)という定式も同根の「循環」にまわりつかれていると言えるだろう。

それに対して、フィヒテはカントの諸著作をよく読んでいたはずなのに、初期「知識学」やその関連著作で「客観的実在性」という言葉はまったく登場しない。それは偶然ではない。「第一批判」に対するメタ理論である「知識学」にとって、カント流の知の「客観的実在性」は問題になりえないからである。すでにこのことが、「知識学」の問題機制が「批判哲学」のそれと根本的に異なっていることを示している。端的に言えば、フィヒテにとって、「知」の一切の実在性は「絶対的自我」のうちのみある。「絶対的自我」の根源的働きこそが「知」の一切の「実在性」の根源である。それゆえ「実在性カテゴリーが適用されるべき他の可能なものすべてにとっては、実在性は自我からそれへと移されるのである」(GA I/2.262)。さらに「第一序論」はこうも断言している。「哲学の内容には、[……]必然的な思惟作用の実在性以外いかなる実在性も属していない。[……]この実在性だけで哲学にはまったく十分である。というのも、他の実在性はけして存在しないということは哲学から生じてくるからである」(GA I/4.207f.)。フィヒテは、カテゴリーにおいて「否定性」と対をなす「実在性」だけが問題なのであり、それは「思惟作用」の「必然性」によって産み出される。したがって、「経験の対象」と関係することによって与えられるような「客観的実在性」は「知識学」の問題機制の埒外にある。

カントの言う「認識の質料」に相当するものは、フィヒテの場合「必然性の感情」(ibid.,186f.,190,211)をとおして、というよりむしろ「必然性の感情」として「与えられる」と言うことはできる。フ

だから、超越論の対象に対する関係は、すなわち、われわれの経験的認識の客観的実在性は、超越論的な法則に基づいているのである」(A 109f.)。「経験の総合における統一の規則」の「客観的実在性は、必然的な制約である以上、いつでも経験のうちに[……]示されうる」(B 196)。「どんな経験における知覚の関係をもア・プリオリに表現している」諸概念の「客観的実在性は[……]もとより経験にかかわりなく認識されうる」(B 269)。

10 たとえば、「或る認識が客観的実在性をもつべきだとすれば、[……]その対象が何らかの仕方では与えられうるものでなければならない」(B 194)。「[客観的]実在性は、経験の質料としての感覚にのみかかわっているので、経験の助けを借りないでそういうものを具体的に思惟することは許されない」(B 270)。「悟性の概念」や「悟性の原則」は、「経験的直観に関係し」ないとすれば、「まったく客観的妥当性をもたず、諸表象と構想力の、あるいは悟性の単なる戯れにすぎなくなる」(B 298)。

11 デカルトは『省察』の「第三省察」で *realitas objektiva* と *realitas formalis* の関係を論じているが、『省察』(ちくま学芸文庫、二〇〇六年)の訳者、山田弘明による訳注を借用すれば、「表象的実在性 *realitas objektiva* とは、観念において表象されているかぎりの実在性」であり、「形相的実在性 *realitas formalis* とは、観念の実在性ではなく、ものそれ自身がつま実在性のことである」(同訳書、一八六—一八七頁)

イヒテの場合「感情」は一般に、内実をもった「表象」を可能とする自我の根源的受動態である¹²。なかでも「必然性の感情」は、この感情が自我の自由によって産み出されたもの（「自由の感情」）でなく、自我の自由の外に由来するある種の「強制」を伴った感情である。フィヒテはこの「受動性」を無視してはいない。つまり、或るものが自我に「与えられる」ことを度外視してはいない。それどころか彼は、これを欠いた哲学は「地盤を欠いた超越論的観念論に行き着く」（ibid.,234）とさえ述べ¹³、「この必然性の感情を伴う表象どこから生じるのか」（ibid.,211）と改めてと問うている。

ところが他方で、フィヒテは——これが「知識学」の特徴的真髓であるのだが——われわれが「必然性の感情」を思い浮かべるとき、「知性は、けして外部からの刻印を感じるわけではなく、〔…〕自分自身の本質が制限されているのを感じるのである」、そしてこのような立場こそが「批判的観念論ないしは超越論的観念論と呼ばれるのだ」（ibid.,200）と断言している。同じことはすでに『全知識学の基礎』でも、「自我は自我であるかぎり、根源的に自ら自身との交互作用のなかにあり、そのことによって初めて自我に対する外からの影響が可能となるのである」（GA I/2,409. vgl.auch 405）と述べられていた（強調は引用者による）。さらに「第二序論」もこう述べている。観念論哲学は「意識の直接的客観がやはり意識自身でしかないことを認めることから始まるのであり」、たしかに「客観的妥当性は存在によって言い表される」にしても、しかし「われわれにとっての存在(ein Seyn für uns)以外いかなる存在も問題になりえない」（GA I/4,211）。この意味で、フィヒテにとっては「自我の外部」は存在しない、すくなくとも、それは「哲学の問題」にはならない。それゆえ彼にとって、「認識の質料」そのもの、それが「与えられる」ことに付随する「質料」の「外部性」などは「哲学の問題」ではなく、それを受け入れることを可能にする自我の受動的-能動的「能力」こそが、それだけが問題なのである。ここに、「経験の可能性の制約」をめぐる両者の問題機軸の相違が——すなわち、感覚の質料が「与えられていること」を前提にするか、その「与えられる」ことの可能性の制約をも超越論的自我のうちに求めるか——ははっきり表われている。

4. ラインホルトの「転向」を契機とした「循環論」への批判

この両問題機軸の関係をどのように評価するか。或る観点からは、「批判哲学」から「より純化された超越論的観念論」への進展を、「経験の大地」からの離反による「知」の「空虚化」の進行と見ることができよう。その代表が、フリースの『ラインホルト、フィヒテ、シェリング』（一八〇三年）の立場である。これは、「批判哲学」を（当時の呼称では）「経験的心理学」の諸分野へと展開す

12 「われわれの認識は、なるほど直接に表象によって物自体と関連するのではないが、だが間接に感情によって物自体と関連しており」、「感情なしにはいかなる表象も可能ではないだろう」（GA I/2,109）。

13 興味深いことに、この箇所ではフィヒテはこう続けている。「この根源的的感情を忘れることは、地盤を欠いた超越論的観念論に行き着き、さまざまな客観の、単に感覚しうだけの述語を説明できない不十分な哲学に行き着く。ラインホルトは、バックがこの誤った途に転落したのと同じように、知識学も誤った途に転落していると邪推しているように、わたしには思われる」（GA I/4,243）。

また『基礎』の或る箇所では、フィヒテは「知識学は経験において初めて実在性を獲得する」、この「要請された事実」を無視する者にとっては、「知識学」は「何ら内容をもたず、空虚であろう」とも述べている（GA I/2,390）。ここでは「知識学の実在性」と「知の実在性」が区別されているのかもしれない。

ることで、「批判哲学」を補完しようとした陣営の典型的な見方である。「批判哲学」をこれとは反対の方向、「より純化された超越論的観念論」へと推し進めようとした潮流の典型的な「批判哲学」評価は、ラインホルトが「知識学」を支持すると「転向」を表明した『混成論文集』第二部(一七九七年)に明瞭に認められる。

その「転向」の理由は、ラインホルトがかの「二重性」に由来する「循環」に気づき、そこに——実は、カント自身が切り開いた——「超越論的思惟」の不徹底を見抜いたことにある。ラインホルトはそこで、次のように述べている。「私は、意識の可能性の客観的制約を(カント風に言えば、経験の可能性の実質的制約を)、外的感覚のうちに与えられたものと想定してきた」。その際「私は意識の外的根拠をヌーメノンとみなし、物自体とは区別してきたのだが」、「その外的根拠は[結局のところ]あの忌わしい物自体に帰される」のだから、そんな小細工によっては「私の体系のうちにあった矛盾」——つまり、結局は「意識の外部に、不可避免的に物自体を——しかも意識の客観として——前提にしていた」という矛盾——は解消されなかった。それゆえ、つまるところ「私の根元哲学は、超越論的なものの可能性のために経験的なものを前提にし、そして、経験的なものの可能性のために超越論的なものを前提にする」という「循環」に陥っていたのであり、この「循環」から脱出するには、「超越的なものの領域への死の跳躍を敢行するほかない」ことを、「私は悟った」のである。「[カントの]批判も、[私の表象能力]理論も試みることがなかった」、「経験的なもの自身を前提にすることからまったく独立に、哲学の内容を演繹すること」を「知識学」は企て、それに成功したのである(*Auswahl vermischter Schriften II*, viiif.)。

たしかに彼がここで回顧しているように、「外的」事物—「物自体」の存在についての『試論』の立場は、曖昧で中途半端であった。その原因は、「表象」の「内的制約」と定義されている「形式」と「素材」のうち、「素材」概念の理解の曖昧さにあった。ラインホルトは当時、「素材」が「外から与えられるもの」であることを根拠に、「主観的素材」と区別される「客観的素材」なる概念をもち出し、「この客観的素材が[……] われわれの外に事物が存在しているというわれわれの確信の唯一可能な根拠を含んでいる」(*Versuch*, §27, 295. vgl. auch §29, 299)と主張していた。彼が「客観的素材」という語で言わんとしているのは、「形式」のうちに取り入れられる(「主観的」になる)「以前の」素材のことである。それに対して「主観的素材」はすでに「形式」と関係づけられている「素材」である。だが、彼の「表象能力理論」の原則に照らし合わせれば、「形式化」される＝「表象される」＝「意識される」以前の「素材」の存在を素朴に想定することは、まったく不合理なことである。それゆえ、この不合理は、彼の「弟子」であるI・C・ディーツによって厳しく批判された。ディーツは正當にも、「客観的素材」など存在しない、存在する「素材」はつねにすでに「主観的」であると反論している¹⁴。かくして、『試論』はまだ「経験的實在論」という「へその緒」を断ち切れていなかったである。

同じ理由から、「物自体」理解にも同様の中途半端さが残っていた。「表象能力理論」に照らし合わせれば、「物自体」は「表象の形式」の埒外にあるのだから、「思惟される」ことはおろか、「表象される」ことさえ不可能なはずである。にもかかわらず『試論』はこう述べている。「表象可能な対象が否認されえないのと同じように、物自体は否認されえない」(*ibid.*, §17, 248)。「物自体」は「素材」

14 Vgl. Dieter Henrich (hrsg.), *Immanuel Carl Diez. Briefwechsel und Kantischen Schriften, Wissensgrundubg in der Glaubenskreis Tübingen-Jena(1791-1792)*, Stuttgart 1997, 23.

の「外的根拠」ないし「原因」として是認されるのである。この窮地から脱するために、ラインホルトは「物自体は、表象しえない或るものの概念としてのみ、表象しうるのだ」(ibid.,249)と語らざるをえなくなっている。その「概念」が「ヌーメノン」にほかならない。たしかに彼は、繰り返し「物自体」と「ヌーメノン」の区別を強調している。だが、それにもかかわらず——先の「自己批判」文章が告白しているように——「ヌーメノン」は、語りえない「物自体」の代替物として偽装的に使われていたのである。

ドイツ観念論史上有名な、「根元哲学」から「知識学」へのラインホルトの「転向」は、上述したように、「経験の可能性の実質的制約」を「意識の外部に」想定し、それを前提にしていたことへの「自己批判」によって引き起こされたのである¹⁵。興味深いことに、この転向を公表した著作『混成論文選集 II』所収の論文でラインホルトは、(カントの最も忠実な弟子のひとりともみなされていた)J・S・ベックもまたカントによる「意識の外的根拠」の取り扱いに疑念を感じ、『唯一可能な立脚点』¹⁶でこの「外的根拠」の抹消を図ったのだが、しかし誤ったやり方でそうしているのだと論評している。ベックは「意識律」にも反対し、より徹底した意識内在主義の立場から、表象の形式のみならずその素材をも産出する主体の根源的作用として「根源的な表象作用(das ursprüngliche Vorstellen)」を提唱した。ラインホルトの解釈するところ、ベックも「純粹理性批判や表象能力理論が、時間、空間およびカテゴリーの客観的実在性を経験的なものに依存させてきたことに抵抗感を抱いた」(ibid.,319f.)のであり、それゆえ「事実としての外的感覚」を前提とせずに表象作用を説明する方法を探究し、それを「根源的な表象作用」に求めたのである。しかし、ベックにとって「重荷となっていた経験的なものを」彼は不当な仕方ですら抹消しようとした。すなわち、彼は「外的感覚や時間や空間」をも「カテゴリーのなかに押し込んでしまい」、「これらをひとまとめにして、根源的な表象作用」と呼んだにすぎない(ibid.,320f.)¹⁷。かくして、「感性」(感覺的質料の受容能力)と「悟性」(質料の整序・統一化能力)の区別は抹消されてしまう。かくして、ラインホルトのこの解釈の成否はとにかく、ベックの「唯一可能な立脚点」の提唱の根底にあったのも、「意識の外的根拠」としての「外的感覚」を認識能力全般のうちにもどう位置づけるかという問題であったのである。

ラインホルトはこの時期、「知識学」を支持する立場から、一連の「知識学」関連著作の連続的書評をALZに公表しているが、カントのかの「声明」での「知識学」理解は、実はこの書評(ALZ 1798,Nr.5-9. 一七九八年一月四～八日付)に基づいている¹⁸。カントはおそらく「知識学」関連著作

15 詳しくは、前掲拙著『ラインホルト哲学研究序説』第九章第四節を参照されたい。

16 ベックは、カント自身からお墨付きを得ていた、批判哲学の『解題付き摘要』の第三巻目を『批判哲学判定のための唯一可能な立脚点』という表題で一七九六年に公刊した。彼自身はこの著作の立場を批判哲学に忠実なものと考えていたが、ケーニヒスベルクの説教師シュルツがそれを批判哲学の根本を掘り崩すものだと批判したことで、カント陣営内部でこの著作の評価をめぐって軋轢が生じた。そのいきさつの一端は、カントに対するベックの長い弁明の書簡(KA XII,162-171, 173-176. 邦訳『カント全集 22 書簡II』三〇七—三一九頁、三二一—三二六頁)に窺い知れる。また、ベック自身の意に反して、フィヒテは「第一序論」で、この著作を自分の「知識学」を理解するための「最高の予習として推奨」している(GA I/4,203)。

17 注(13)に挙げた、(フィヒテが「認識の実在性」の根拠づけ問題に関して述べている)ベックについてのラインホルトの評価とは、このような評価を指している。

18 アカデミー版カント全集の「書簡への注」は、この書評の著者を「おそらくエアハルト」だと推定している(KA XIII,481)。だがこの推定は、エアハルトが当時計画していた『哲学雑誌』誌上での『自然法の基礎』書

を(少なくとも、まともには)読んでおらず¹⁹、この書評に基づいて「知識学」を理解している。だから当然、カントの目には「書評子は相当なひいき目で書いている」(KA XII,241)と映るのである。だが、ラインホルト自身はこの三年後にはフィヒテと決別し、今度は「理性的実在論(der rationale Realismus)」の立場から、「認識の実在性」の実在論的根拠づけに関するカント理論の不十分さを、そして、フィヒテ-シェリング流の純化した「超越論的観念論」の致命的欠陥を激しく批判するようになる。一七九七年と一八〇一年の間に、「認識の実在性」の根拠づけ問題に関するラインホルトの立場は正反対のものになっているのである。

5. 実在論的立場からの「実質的制約」の欠如批判

ラインホルトのこの批判に言及する前に、もう一つ興味深い事実を紹介しておく必要がある。カントの「知識学」無効「声明」公表から一年ほど後、シェリングとフィヒテの立場の相違が顕在化してくると、今度はシェリングがフィヒテに向けて、「知識学」は実質・実在性を欠いた「論理学」のようなものだと批判を浴びせるようになるのである(vgl. GA III/4,363)。シェリングのフィヒテ宛書簡(一八〇〇年一月一九日付)に曰く、「純粋な知識学」は「観念論の形式的証明」にすぎず、「まったく論理学のように働いているだけであり、およそ実在性とは何のかかわりももっていない」。「知識学」には「観念論の実質的証明」が欠けている(ibid.)。当時、「自然哲学」と「超越論的観念論」とを、哲学の二つの「基礎学」として構想しつつあったシェリングにとって、「観念論の実質的証明」は「自然哲学」によって担われるべきであり、「観念論の形式的証明」である「知識学」はこれを欠いているのである。かくして、カントが「経験的実在論」の立場からフィヒテ的知の「実質的制約」の欠如を批判しているのに対し、シェリングはこのとき「知識学」では根拠づけられない「自然」の実在性を主張する立場から、同じ点を批判している。

さて、ラインホルトは「無神論論争」(一七九九年春)を契機に、フィヒテの観念論的な問題機制に批判の目を向けるようになる。この「論争」でヤコービに与した彼は、(後に公刊されることになる)『フィヒテ宛の書状』²⁰でこう述べる。「哲学的知は[...] 実的な実在態(reelle Realität)と結びつけられうるのであり」、「この実的な実在態を欠けば、哲学的知は虚構にとどまる」(GA III/3,307f.)。もちろん、この「実的な実在態」は「知」のカントの言う「客観的実在性」のことではない。それは一切の実在的なものの根拠としての根源的実在、つまりヤコービの言う「神」のことである。それゆえ、これは「知」の対象ではなく、「信」の対象にすぎない。とはいえ、それは「客観的実在性」の源泉であるはずである。こうして、ラインホルトは実在論に接近していく。そして、一八〇〇年の晩秋には、バルディリの「論理的実在論」の評価をめぐって彼はフィヒテと決定的に

評とALZ書評を混同している結果生じた誤認であり、書評の著者はラインホルトである。邦訳『カント全集 22 書簡II』の「訳注・校訂注」(四九二頁)もアカデミー版の誤りをそのまま踏襲している。

19 カントは一七九八年四月五日付のティーフトルンク宛ての書簡で、フィヒテから寄贈された「知識学」をまだ通読しておらず、ALZ紙上での書評で「初めてその内容について知った」と告白している(KA XII,241)。ALZでの「知識学」批判「声明」はこれから一年以上も後のことだが、その間にカントが「知識学」をまともに読んだ形跡はない。

20 その内容は、拙著『ラインホルト哲学研究序説』第十章第二節、第三節参照されたい。

袂を分かつことになる。

その後一八〇一年から〇三年まで、ラインホルトは『一九世紀初頭の哲学の状態を簡便に概観するための寄稿集』(以下『概観-寄稿集』)という表題の雑誌(合計六分冊)を編集、公刊し、「理性的実在論」と自ら称した立場から精力的な論陣を張っている。この時期彼は、「哲学の第一課題」は「認識の実在性」の「実在論的」究明にあることを繰り返し強調している。ここでもまた「認識の実在性」の解明が最重要の課題なのである。彼によれば、「認識の実在性」が確認されうるには、認識されうるもの、認識の対象が(それ自体としては認識不可能な)「根源的に真なるもの(das Urwahre)」と連関づけられなければならない。この「根源的に真なるもの」とは、ヤコービの言う「真なるもの」、つまり一切の実在性の「絶対的根拠」、「根源的根拠」としての「神」のことである。かくして、その「実在論的」究明の要点は、「真なるもの(das Wahre)が根源的に真なるもの¹介して(durch)認識され、かつ「根源的に真なるものが真なるものに²即して(an)認識されるような知」(Beiträge-U, H.1,72)の成立を証示することになる。ヤコービの場合とは違って、ここでは「根源的に真なるもの」はもはや「信」の対象として「予感」されるだけではなく、「認識」のプロセスのうちに引き入れられている。よって、そのような両者の媒介的「知」の証示は「認識の実在性を、知のうちで、かつ知によって真に実証するのである」(ibid.,89)。その認識のプロセスを具体的に展開すべく、ラインホルトは「真なるもの」と「根源的に真なるもの」の往還運動を根拠づける「現象学」の呈示を試みている²¹。この「現象学」によれば、われわれが「真なるもの」に即して「根源的に真なるもの」の「顕現」を捉えることによって、「真なるもの」のわれわれの認識は「実在性」を得ることが可能になる。

それと同時に、ラインホルトはこの『概観-寄稿集』のいくつかの分冊でカントによる認識の「実在性」の根拠づけ理論、およびフィヒテの「純粋な超越論的観念論」による「認識の実在性」の根拠づけを批判している。カント批判はこう展開される。カントの場合、「実在的認識の実在性は相対的であるにすぎない。すなわち、その実在性の本質は、主観それ自体に基づけられた概念および直観の諸形式(経験の形式的制約)と諸感覚(経験の実質的制約)との相互関係でしかなく、したがって実在性は絶対的なものにはまったく帰されえない。かくして、認識は[...]経験的に実在的であり、超越論的に観念的でしかありえないのである」(ibid.,79)。ラインホルトはここで、以前の「循環」論批判を——ただし、「実在性」理解に関するかつての立場とは正反対の立場から——繰り返していると言えよう。

では、フィヒテに対する批判はどうか。すでに触れたように、フィヒテは「知」の「実在性」の根拠にあたるものを、自我の受動性の産物たる「感情」に、とくに「必然性の感情」、「感じとられた必然性」に求めている。ラインホルトによれば、この場合フィヒテは、それ自体は「純然たる観念性」である「純粋な自我」の「自由と無制限性」を「観念性」に割り振り、そしてその「必然性と被制限性」を「実在性」に割り振っているにすぎない。それゆえ「純粋な自我」は「無制限であるかぎり」で純然たる観念性をもち、制限されるものであるかぎりでのみ、実在性をもつにすぎない(ibid.,85)。しかし、そのような「実在性」はあくまで「主観的な実在性」にすぎず、「客観的な実在性」ではない。「理性的実在論」者ラインホルトからすれば、カントは「内」(経験の形式的制約)と「外」(その実質的制約)との相互依存関係-循環によって、「知」の「客観的な実在性」を根拠づけようとしたとすれ

21 詳細は、前掲拙著第十二章第一節、第三節を参照されたい。

ば、フィヒテはその「相互作用—循環」を「純粋な自我」の「内」に移しているにすぎない。これは、いわば「純粋な自我」の<「内」における、「内」と「外」>の相互作用—循環にすぎない。それゆえ、両者ともにおいて、「客観的実在性」の根拠づけは絶対的でなく、「循環的である」という意味で「相対的」にすぎないのである。

6. 小括

さて、われわれはカントの知識学批判「声明」を機縁に、「客観的実在性」という特定の概念を指標に、「批判哲学」から「初期観念論」への展開過程を眺めてきたが、以上に略述してきた議論の経緯を踏まえるならば、「客観的実在性」問題をめぐっても、「批判哲学」と「初期観念論」の関係は単純に「深化」とか「退歩」とかいう語で片付けるわけにはいかないであろう。この問題をめぐる事態は単純ではなく、すでに述べたように複合的、交差的である。すなわち、より純粋な「超越論哲学」に対してカント陣営の側から「客観的実在性」の欠如という批判が起こった(レーバルクやシュミートのラインホルト批判、カントのフィヒテ批判)だけではなく、純化した超越論哲学陣営の内部でも似たような批判(シェリングのフィヒテ批判)が起こっていた。これに対して、逆の観点から、すなわち意識内在主義の徹底という観点から、「客観的実在性」の源泉たる「感覚の質料」の外在性に対する批判(一七九六年のベックの「実質上の」カント批判、一七九七年のラインホルトのカント批判)が起こっていた。さらに、これら両者とも立場を異にする「理性的実在論」の立場からは、カントとフィヒテの「客観的実在性」の根拠づけが結局「実在性」の根源への連関を欠いているがゆえに、「相対的」根拠づけにとどまらざるをえないという批判が浴びせられていた。

このように「知」ないし「認識」の「(客観的)実在性」をいかにして確保するかという問題そのものにおいては「連続性」を認めうるのに反して、その解決策はまったく「不連続」、いや敵対的でさえある。

「知」ないし「認識」の「(客観的)実在性」という概念のもとに何を理解するか、その相違に応じて、この概念の根拠、源泉をどこに求めるかの相違が生じてくる。誤解を恐れず敢えて単純化すれば、その根拠をヤコービは *realitas formalis* としての「神」に求め、フィヒテは *realitas objectiva* としての純粋な思惟の必然的規則に求め、カントは両者の媒介的循環に求めた。この相違の根底には、そもそも「経験の可能性の制約」をめぐる問題機制、問題の立て方自身の相違がある。そして、その問題機制の変容をひき起こす動因は、「批判哲学」の方法自身のうちに——経験的認識を可能とするア・プリオリな認識の認識としての「超越論的」認識という着想のうちに——すでに含まれていた。この問題機制それ自身の変容と相違を無視して、特定の概念や視点だけを指標にして、或る哲学の型から別の哲学の型への変化を「深化」だとか「退歩」だとか断じるのは不毛なことであろう。「カントからフィヒテへ」、あるいは「フィヒテからシェリングへ」といった安直な標語にもときとして潜んでいる、そのような短絡的断定によって「見えてくるもの」よりも、「見えなくなるもの」のほうが大きくなるであろう。